

## 乳牛の防暑対策を 再点検しましょう

平成16年は猛暑で、熊谷近辺でも気温が体温を越える日が19日もあり、ここ5年間で最もつらい夏でした。

本格的な夏を迎える前に、暑熱対策の準備をしましょう。

牛はドラム缶1本分(約200L)の大きな第一胃を持ち、消化がうまくいくよう発酵を行っています。この時、非常に多量の熱が発生します。牛は外気温が上がると、体の中から出た熱を効率よく下げられません。搾乳牛がぎりぎり我慢できる気温は27℃です。

高温が数日間続くと、熱が体にたまり人間で言う「うつ病状態」になります。こうなると、自動的にコントロールしていた神経系統にズレが起き、内臓の働きやホルモンの分泌に変調をきたし体調を崩します。

こうなる前に、飼養環境の再点検を行います。

① 畜舎内の状態はどうなっていますか？

② 畜舎の周りの環境整備は万全ですか？

③ 放牧場の水飲み場、日陰はありますか？

④ 餌や水の与え方、ミネラル・ビタミン剤に配慮していますか？

防暑対策の基本は、できるだけ涼しい環境を作ることです。屋根に石灰を塗布したり、散水などを行い直射日光を遮断します。また畜舎内では風の流れを作り、風通しを良くすることが大切です。以前にもお伝えしましたが、簡

易散水装置と送風の併用で牛体の熱放散を図ることは有効です。(写真1)

しかし散水量が多すぎると、牛床が濡れて乳房炎の発生が危惧されますので、牛の背中に風速2m/秒が当たるように施します。(写真2)

実際に牛の体温が1℃低下します。

1日のうちで牛の体温が一番上昇するのは、夕方5時から夜10時頃です。牛にとって

苦痛な時間帯を和らげるために、夜間舎外に出すことも大変効果的です。

しかし外に連れ出す場合は、十分に慣らしてから行うことが大切です。急な外出しは不慮の事故、例えば「綱がらみ」「脱柵」などが考えられますので気をつけて下さい。

また涼しい夜間のうちに、十分な粗飼料が食べられるように工夫することも夏ばて予防に有効です。早めの対策で猛暑を乗り切りましょう。



写真1 スプリンクラーと送風

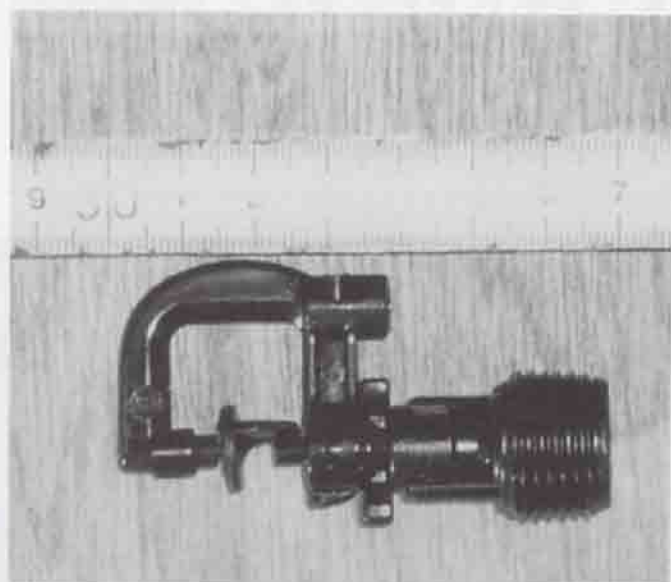


写真2 園芸用スプリンクラーのノズル